

研究報告掲載報文要旨

ムラサキウニによるクロアワビ稚貝の保護効果の検証

篠原義昭

ムラサキウニ *Heliocidaris crassispina* に害敵種からクロアワビ稚貝 *Haliotis (Nordotis) discus discus* を保護する効果があるのかを検証するため、ムラサキウニの有無による4種の害敵種（マダコ *Octopus sinensis*, イシガニ *Charybdis japonica*, キュウセン *Halichoeres poecilopterus*, ヤツデヒトデ *Coscinasterias acutispina*）のクロアワビ稚貝に対する捕食行動の変化を観察する水槽実験を実施した。その結果、ムラサキウニの棘の下に分布するクロアワビ稚貝はマダコおよびキュウセンから明らかに捕食されにくくなった。一方で、イシガニに対しても捕食されにくくなる傾向は見られたものの、前述の2種に比べてムラサキウニによる保護効果は低いと考えられた。また、本実験系ではヤツデヒトデに対する保護効果を示すことは困難であった。

京都府沖合におけるアカムツの生物資源学的特性を考慮した底曳網の漁業管理方策の提案

熊木豊, 山崎淳

京都府の底曳網漁業で近年の重要対象種となっているアカムツ *Doederleinia berycoides* は、未成熟魚の漁獲割合が高く資源の減少が懸念されている。そこで、京都府沖合に分布するアカムツの年齢と成長、成熟、自然・漁獲死亡などの生物資源学的特性値を推定するとともに、未成熟魚の保護に効果的なコードエンドの網目拡大を実施した場合の漁獲量および漁獲金額の変化を試算した。目合を5節（内径約77mm）以上に拡大すれば、3~4年目以降に漁獲量および漁獲金額が現状より増加すると予測され、アカムツの資源管理型漁業の一方策になると考えられた。

京都府沖合におけるモモガニの分布（短報）

森川晃行, 熊木豊, 丸山香野子

京都府における底曳網漁業の最重要種である甲羅の硬い雄のズワイガニには、甲幅に対して鉗脚高が高い成熟個体(タテガニ)と鉗脚高が低い未成熟個体(モモガニ)が存在する。モモガニは、通常脱皮の遅延または休止した状態であり、いずれ脱皮してタテガニになることから資源管理の対策を講ずることが望ましい。そこで、本府沖合における漁期中のモモガニの分布特性を調べたところ、タテガニと同所的に分布していた。タテガニの選択的な漁獲は出来ないことから、次善の策として混獲されたモモガニのリリースが考えられた。